

## プロローグ

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 ジュニア・フェロー  
山西 弘朗 Hiroaki Yamanishi

## 人生には人生を大きく変えるような思いがけない出会いがある

筆者は2007年4月に香川大学法学部に入学し、はじめて初修外国語として「中国語」と出会った。しかし、この出会いはあまりにも突然で、思いがけないものであった。筆者はアメリカ留学についても、これと同じような経験をしている。中学時代に、自分が置かれている社会や環境が自分に合っていない感覚を日々抱くようになった。それに反抗期も重なり、アメリカ留学を希望するようになったが、筆者以外だれもこの希望が叶うなどと考えている人は周りにいなかっただろう。しつこく懇願する筆者に母は「おそらく不合格になるだろう」という気持ちで筆者がアメリカ留学の選考申請に応募することを許してくれた。筆者が応募申請した交換留学プログラムはアメリカ国務省が主催するもので、公立高校の学費やホームステイ先での生活費などの費用がほぼ無償であるため、応募者が多く、選考方法も英語試験に加え、日本語での面接、保護者同席での面接など厳しい内容だったので、そのように予想したのも当然である。しかし、選考に合格し、母の予測に反して、アメリカ留学は現実のものになった。

## アメリカ留学から大学進学へ

アメリカ留学は1年あまりであったが、派遣先のアイダホ州ボイシ市での経験は15歳の筆者には、それまでの価値観や生き方を大きく変えるものとなった。一番大きな変化は約30キロも増加した体重だったのだが、見えないものの変化の方が大きく、留学前に在学していた日本の高校に復学してから、いわゆる「逆カルチャーショック」を感じる事が度々あった。その中で、「自分らしい」生き方を模索するようになった。ちょうど高校2年生の2001年9月11日に、ニューヨークで同時多発テロ事件が発生し、まるで映画の1シーンのように世界貿易センタービルにぶつかっていく飛行機の映像を緊急ニュースで見ながら、これから世界がどうなるのだろうかとか大きな不安に襲われた。

筆者はアメリカ留学の経験で、自由と多様性の雰囲気溢れるアメリカにすっかり魅了されていたので、世界にこのようなアメリカを憎む人々がいることなど想像もしていなかった。そのような筆者にとって、このテロ事件の心理的衝撃は、同じ年代の日本の高校生よりもはるかに大きかった。しかもこの事件が発生する1カ月ほど前に筆者は留学先を再訪していた。

このテロ事件が発生し、アメリカはアフガニスタンへの報復攻撃、そしてイラク戦争へと進むのだが、この中で筆者も自ずと中東問題や国際政治について興味を抱くようになった。「将来、世界平和に貢献できるような国連の職員になりたい」、これが大学進学を控えていた筆者の希望として胸が膨らんでいった。

国連職員や進学する大学についていろいろと情報を収集する中で、法学部で「国際法」について学べる事が分かり、法学部で国際関係論などの国際政治についての講義もあることも分かった。そして、実家の徳島から一番近い法学部である香川大学の法学部に進学することになった。

## 中国語との出会い

大学に進学すれば英語以外に初修外国語を学ばなければいけないことはわかっていた。香川大学では当時、初修外国語として、

フランス語、ドイツ語、中国語、ロシア語の4つの外国語が選択できるようになっていた。国連職員を目指す筆者は迷わずフランス語を第1希望に選んだ。理由は国連などの国際会議で使用される言語は、英語が基本だが、その次に使用頻度が高いのがフランス語だからである。事前に、法学部の多くの学生は、日本の民法や刑法がドイツ法を継受していることからドイツ語を選択すると聞いていたので、フランス語なら受講希望者の多寡によって人数調整されても、問題なく受講できると思っていた。そのため第2希望以下どの外国語を選択したかも記憶にないほどであった。しかし、人生は突然で、思いがけない出会いと直面するものである。初修外国語の選考結果が貼られた掲示板を確認しようと自分の名前を探すと、名前の横の欄の「中国語」という記載が目飛び込んできた。筆者は自分の目を疑った。「これは事務的なミスだろう」と、教養科目の事務所に再確認に訪れた。「いいえ。ミスではありません。あなたの受講する初修外国語は中国語です」。けんもほろろに答える事務員に、「いや、法学部の学生のほとんどがドイツ語を選択するはずだから、第1希望にしているフランス語が受講できないなんておかしいです・・・」と食い下がったが、すぐさま「第1希望にフランス語を選んでいた法学部の学生のうち2人だけ抽選に漏れました」とさらに説明を加えてきた。このような顛末で、意気揚々と国連職員を夢見ていた大学1年生の筆者は入学した数日後、絶望の淵に突き落とされたのである。「人生ってこんなことがあるんだ……」と、筆者の心には「？」が絶え間なく湧き出してきた。そして、初修外国語の第1回目の講義で「Bonjour (ボンジュール)」から「你好 (ニーハオ)」の悲しい現実と直面することになった。筆者は中国語の講義を受けるたびに憂鬱な気持ちに苛まれた。

## 台湾との出会い

筆者はもともと勉強が好きではなかった。小学生の時は、宿題を自宅でやった記憶は一度もない。毎日、放課後教室に残されて宿題をしていた。勉強嫌いな筆者にとって、自宅でわざわざ嫌な学校の宿題などやりたくなかったのである。しかし、中学時代に勉強ができる友人と出会って、その友人に勉強を教えてもらうなかで、徐々に勉強が分かるようになっていった。高校時代のアメリカ留学の後、英語は何も予習をしなくても、ほぼ満点を取ることができるようになった。こうした変化の中で、「勉強は嫌いでも、悪い成績を取るのはもっと嫌」という人間になっていた筆者は、「中国語は嫌いでも、悪い成績を取るのはもっと嫌」という気持ちで、とりあえず、中国語の勉強を頑張るようになった。中国語は特に好きではなかったが、中国語を教えてくれる先生が好きになった。「ちょっと変わった先生」、これが筆者の先生についての印象だったが、講義の中で話してくれる内容がユニークでとても面白かった。先生は学生時代、落研に所属していたらしく、いつも扇子を胸ポケットに入れて講義をしていた。先生は中国文学を研究されているが、台湾人恩師との出会いから、台湾の近現代文学についての研究も進められており、台湾での楽しいエピソードを聞いていると、なんとなく催眠術にかかったように、未知の地「台湾」への興味が湧き上がってきたのである。